# 第四講　論説　芸術編

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

自然民族、あるいはそれに近い、つまりア「近代化」の影響をあまり濃厚に受けていないような共同体では、シャーマンが社会の中で重要な働きをしている。シャーマンの役割は、言うまでもなく、呪術的な社会に特徴的と言われるもので、超自然的な霊との交流の中で、予言、占い、あるいは病気の治療、加持などを行うことにある。そうした役割を果たす場合に、シャーマンである人間は、通常の意識状態とは違った、トランスの状態になれることが大切な特徴で、交流する霊が直接シャーマンに憑(ひょう)依(い)するにせよ、あるいはそうした超自然的な存在の間接的な翻訳者になるにせよ、シャーマンが異常な意識状態にあること、あるいはなり得ることが、客観的にその役割の可能性を社会的に保証することになるのである。

言い換えれば、通常の人間には達し得ないような異常な精神状態を、自らに実現できる能力を供えた人間が、シャーマンということになる。そうしたトランスの状態を、どのように導くか、今では薬物が可能な手段として知られているが、一方では、トランスの状態にある人間の脳内にはある種の物質が存在していることも確かめられてはいるが、音楽、ある種の言葉の執拗(しつよう)な反復、踊りなどの身体的な動作などが、実際にトランスを導く（つまりある種の物質の脳内への分泌を促す）のであって、それは、尋常で日常的な秩序からのはみ出し、あるいは「逸脱」と呼んだものに相当する。

したがって、容易にそうした異常な状態に陥ることができる人間というのは、日常的な秩序の立場からすれば、「アウトサイダー」として分類される人々である。今日の近代社会では「精神病者」あるいは「精神病質者」と見なされることの多い人々ということができる。［A］呪術社会では、そうした「(注)アリエネ」に相当する人々に、「病気」のレッテルを貼って、病院に閉じ込めたり、あるいは保護観察的な処置をしたりするのではなく、シャーマンという社会の中でもある場合には極めて重要となる役割を割り振ることによって、そういう人々を共同体の秩序の中に取り込むという手段を講じている、と考えることができる。

このような事実は、ある共同体が、日常的に安定しているという意味での「安全」を考慮する場合でも、「アウトサイダー」や「逸脱分子」を、排除したり、圧殺したりすることなく、共同体の内部に彼らの存在する場所を造ることによって、彼らのエネルギーを吸収するという方法をとることがある、ということを教えてくれる。

しかも注意すべきは、シャーマンが活躍すべき機会というのは、共同体の成員の病気、あるいは不幸、あるいは敵の襲撃など共同体にとっての厄介事が眼前にあり、多少とも、共同体の日常的な安定が脅（おびや）かされているときであるという点である。

このような目で問題を眺めて見ると、近代社会でも同じような役割がいくつかあることに気づかされる。例えば芸術家と言われる人々がそうである。一八世紀までは、今日では「芸術」という概念は、実はヨーロッパにおいて、近代化が進んで初めて誕生したものではなかったであろうか。「芸術」という概念は、実はヨーロッパにおいて、近代化が進んで初めて誕生したものではなかったであろうか。

このような目で問題を眺めて見ると、近代社会でも同じような役割がいくつかあることに気づかされる。例えば芸術家と言われる人々がそうである。一八世紀までは、今日では「芸術」のジャンルに分類されている仕事は、すべて「職人」の仕事であった。詩人だけは別だったかもしれないが、それでも詩の創作には、身につけるべき基本的な技術（「グラドゥス・アド・パルナッスム」と呼ばれる）があって、ちょうど職人が修行によって、技術的成熟を目指すように、習練を積まなければならなかった。絵画、彫刻、あるいは音楽などは、全く「職人」の世界であって、美学的な理念を追求する、社会から隔絶した特殊な人種としての「芸術家」などという存在はなく、また、そうした人種が美を追求する営みとしての「芸術」というものもなかった、と私は考えている。

逆に言えば一八世紀末から一九世紀初頭にかけて、イ近代社会の成熟と符節を合わせて、世界の歴史の中で初めて「芸術」というジャンルが誕生したのである。

ところで、近代社会のなかで「芸術家」と言われる人々は、一体どのように考えられているだろうか。多くの場合、彼らは先ず社会の「はみ出しもの」である。一風変わったなりをし、世の中の常識から逸脱し、あるいは常識を敵視している。「健康」で「健全」で「清潔」で「安全」で「何の危険もない」と思われるような「芸術」に、芸術としての魅力はない。かつての文士の間では、このテーゼを逆にして、「はみ出しもの」を装えば、それで「芸術家」であることの証明になると考えられていた節がある。むろん逆は成り立たない。つまり［Ⅰ］は総じて［Ⅱ］であるにしても、［Ⅲ］が総じて［Ⅳ］になるわけではない。

ところで、単に外見や生活態度ではなく、芸術活動そのものにおいて、社会の規範から「はみ出す」という場合に、もっとも典型的には、文学、絵画、彫刻、写真、映画などにおける「猥褻（わいせつ）性」の問題がある。かつてD・H・ローレンスの『チャタレー夫人の恋人』の邦訳を巡る裁判では、新聞紙上にしばしば「芸術か猥褻か」という惹句（じゃっく）が見出しに(1)躍った。つまり、この事

実は、「芸術」と「猥褻」とは対立事象と解釈され、「芸術」ならばよく、「芸術」でなければ社会規範に反するもの、つまり猥褻である、という考え方が、しごく当然のこととして、受け入れられていたことを物語っている。

「猥褻」ばかりではない。社会の日常的秩序感覚から見れば、明らかに外れているようなものでも、例えば便器の壊れたものを展覧会場に並べて作品とすることも、あるいは使い古したテレヴィジョン・セットを多数森の中に配して、「芸術作品」とするのも、あるいは、舞台の上に蓋（ふた）を開けたピアノを置き、袖から燕尾（えんび）服に身を固めたピアニストが登場して、ピアノの前の椅子に腰掛けて、ただ何分間か、そこに黙って座らせておくだけで「芸術作品」と主張するのも、いずれも、「芸術」の名において行われるからこそ、そして、社会も一応そうであることを了解しているからこそ、それなりに許されるのであって、もし、そうした行為が、芸術という名を冠せられていなかったとしたら、明らかに当事者は、精神に異常のあるものとして扱われるはずである。言い換えれば、何かが「芸術」である限りは、当該の社会が日常的に認めている規範の許す範囲を相当程度逸脱しても、それは容認されるという前提了解が、近代社会では出来上がっていることになる。

話は変わるようだが、精神医学の一部に「病跡学」（パトグラフィ）と名付けられた領域がある。通常は、天才的な創造者に関して、その創造行為と、その人物の精神における病的状態との間の相互関係の有無や、その程度を、作品そのものと、伝えられる日常的生活との分析を通じて、明らかにしようとする学問である。天才的創造者が、多かれ少なかれ、常人の「健康さ」からは距離のある存在である、という印象、［B］「天才と狂人とは紙一重」という俗言を、精神分析によって確認しようとする、と言い換えたら、病跡学の専門家は憤慨なされるだろうか。しかし、病跡学という名前からして、もともと対象が「病気」であることを前提にしたものである以上、天才的創造者と呼ばれる人々の間に、通常の人々の間でよりははるかに高い頻度で「アリエネ」が見られることも、当然の前提になるだろう。

天才的創造活動をしていることが「狂気」を誘発するのか、「狂気」が天才的創造活動を生むのか、いずれにせよ、両者の相関関係は濃厚であると見なければならない。そして、そうした社会の日常的秩序から逸脱する傾向を備えた「アリエネ」たちを、共同体から排除するのではなく、社会の秩序の内部に繋（つな）ぎ止めておくための、一つの有効な手段がまさしく、「芸術」というジャンルを造り、そこにそうした人々の仕事をカテゴライズすることであったのではないだろうか。

ちょうど呪術社会が、「アリエネ」に当たる人々のエネルギーを、共同体から排除してしまうのではなく、シャーマンという

形で共同体内部に吸収するという手段をとっているのと、全く同じことが、近代社会における「芸術」であると言えるように思われる。

さて、上に、近代社会において「芸術」が確立され、それが、社会規範からの逸脱のエネルギーを、個人的にも社会的にも、共同体内部に吸収する役割を果たしている、という仮説を考えてみた。それは、芸術家と呼ばれている人々の個人的なエネルギーを、社会の内部に吸収するだけではない。一般の人々のなかに潜在的にくすぶっている、規範への反抗や否定や逸脱のエネルギーをも、芸術家の活動が、代替機能のように引き受けることによって、芸術は、そうした社会のなかの一般のエネルギーをも共同体内部で吸収する、という二重の役目を果たしているように思われる。俗な表現を使えば、一般の人々がしたくてもできないような規範破りを芸術家が代わってやってくれることによって、代償的な効果が生まれることにもなる。

その意味では、芸術ないし芸術家は、近代社会が安定した形で維持されるための社会的安全装置の一つと考えることができる。

しかし、問題はその先にある。というのも、このような状況下には、守ることを前提とされている社会の既存の規範は、全く無傷でいるというわけにはいかないからである。というのも、芸術家の提示するものは、それなりに既存の社会規範や、共同体が自明のものとして守ってきた価値基準などへの抵抗、批判、抗議、拒否を示すものであり、如何にそれが「芸術」の名の下に提出されていようと、そして社会がただ「芸術」の名の下でのみそれを容認しているに過ぎなかろうと、それは依然として、既存の規範に対する「ノー」の宣言にほかならない。したがって、それが共同体のなかで(2)名目的にせよ容認されることは、共有されている規範や価値が、絶対のものでないことを容認することでもある。したがって、そこからは、社会全体の規範が動くことをも、容認せざるを得ないという結果が生じる。

もちろん、芸術などという安全装置によらないような社会でも、共有されている規範は絶対的に動かずに存在し、長い時間にわたって成員を支配し続ける、というようなことにはならないのが普通である。他の文化との接触、あるいは自己自身の中に内蔵された逸脱のエネルギーの、別の形での評価などの要素が働けば、当然のこととして、規範や価値は動かざるを得ない。

しかし「芸術」という「安全」装置の場合には、本来的に、「安全」であるのは社会ないしは共同体全体であって、それが成り立つ基盤としての、共有される価値体系などは、その意味では「安全」ではあり得ないことになる。

[C]、このような安全装置に頼るとすれば、社会の「安全」という概念は、決して、既存の社会規範、既存の社会構造が、

時間の経過にもかかわらず、無傷で経過する、ということにはならないことを認めなければならなくなる。

ここでわたしたちは、社会の安全ということに関して、少なくとも二つのものを区別しなければならないことを学んだことになる。

その一つは、文字どおり、ある社会が変化を被らずに、そのまま維持される、という状況である。第二は、社会の内部や構造、あるいはそれを支える原理的な規範などは、少なくともある程度の変化はしつつも、社会全体としては、それなりに、危機的事態を回避して、時間の経過のなかで維持されていく、という状況である。

D 前者を「静的な安全」、後者を「動的な安全」と呼ぶとすれば、社会の安全には、この二つの種類の概念があって、どちらを目指すかによって、その目的を達成するための、処方箋（しょほうせん）も、あるいはそこでとられる手段も、変わらざるを得ないのである。

――村上陽一郎『安全学』――

（注）
アリエネ……フランス語で「疎外された者」「精神病者」のこと。

問1　空欄A・B・C・Dにあてはまる最も適切な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A
1　つまりは　2　仮に　3　それゆえ　4　しかし
5　あるいは

B
1　それゆえ　2　つまりは　3　ところで　4　仮に
5　しかも

C

1　したがって　2　ところが　3　逆に　4　ところで

5　ちょうど

D

1　ところが　2　ある意味で　3　少なくとも　4　一方で

5　仮に

問2　空欄Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳに入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

1　Ⅰ「職人」　Ⅱ「芸術家」　Ⅲ「芸術家」

Ⅳ「職人」

2　Ⅰ「芸術家」　Ⅱ「職人」　Ⅲ「職人」

Ⅳ「芸術家」

3　Ⅰ「芸術家」　Ⅱ「芸術家」　Ⅲ「はみ出しもの」

Ⅳ「はみ出しもの」

4　Ⅰ「はみ出しもの」　Ⅱ「芸術家」　Ⅲ「芸術家」

Ⅳ「はみ出しもの」

5　Ⅰ「芸術家」　Ⅱ「はみ出しもの」　Ⅲ「はみ出しもの」

Ⅳ「芸術家」

問3　傍線部（1）「躍った」、（2）「名目的に」の言葉は問題文中ではどのような意味で用いられているか。最も適切なものを、それぞれ一つずつ選べ。

（1）躍った

1　バラバラに乱れていた　　2　たくさん見受けられた
3　激しく揺れ動いていた　　4　うれしそうに取り上げられた
5　リズミカルに動いていた

（2）名目的に

1　客観的に　　2　芸術的に　　3　実体的に　　4　社会的に
5　表面的に

問4　波線部ア「『近代化』の影響をあまり濃厚に受けていないような共同体では、シャーマンが社会の中で重要な働きをしている」とあるが、筆者はそうした共同体の中でのシャーマンの働きを通してどのようなことがわかると考えているか。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

1　呪術的社会では、病気の治療や加持を行うシャーマンは通常の人間では不可能な異様な精神状態を作り出せる「アウトサイダー」として排除されていることがわかる。
2　呪術的社会では、超自然的な霊と交流できる能力を持つシャーマンは排除されることなく、活躍する場を与えられることで共同体の秩序の中に取り込まれていることがわかる。
3　通常の人間では達し得ない異様なトランス状態を自ら実現できる能力を持つシャーマンは、近代社会では一種の「精神病者」として病院に閉じこめなければならないことがわかる。
4　疫病がはやる、外敵に攻められるなど、共同体の危機に活躍すべき機会が与えられることで、シャーマンは特殊な能

力を持った「アリエネ」であることを証明しようとしているのだということがわかる。
5　超自然的な霊が憑依したり、それらとの間接的な翻訳者になったりするシャーマンが活躍していることから、その共同体が一八世紀以前の古い共同体であることがわかる。

問5　波線部イ「近代社会の成熟と符節を合わせて、世界の歴史の中で初めて「芸術」というジャンルが誕生した」とあるが、筆者は本文中で「芸術」「芸術家」をどのようなものと考えているか。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。
1　芸術というジャンルは美を追求する、社会から切り離された営みであり、芸術家とは常識から逸脱し、あるいはそれを敵視する存在である。
2　芸術というジャンルは健康で健全で清潔で安全なものではなく、芸術家とはその中にあって職人的で、社会常識を持った特殊な人種である。
3　芸術というジャンルは近代社会では職人的な専門技術の世界であり、芸術家とは技術的成熟を目指す特殊な人種である。
4　芸術というジャンルは文学や絵画、彫刻、音楽などの美を追求する分野であるが、芸術家とは必ずしも「はみ出しもの」とはかぎらない。
5　芸術というジャンルは一八世紀までは職人の仕事とは異なった特殊な世界であり、芸術家とは常識から逸脱した「はみ出しもの」である。

問6　問題文の内容と合致するものを、次の中から**二つ**選べ。
1　社会の安全には、既存の社会が変化せずに維持される「静的な安全」と、ある程度の変化を容認しつつ全体として時間をかけて維持されていく「動的な安全」の二つがある。
2　社会の安全には「静的な安全」と「動的な安全」の二つがあるが、どちらを目指すにしても、近代社会にとって不可欠な「安全」を揺るぎないものにするという目的を達成するためにとるべき手段に違いはない。

3　超自然的な霊と交流できるシャーマンや社会常識から逸脱する芸術家は、社会の「安全」を揺るがす存在として「アウトサイダー」「精神病者」などのレッテルを貼って排除しなければならない。

4　「芸術」とは近代社会の成熟とともに生まれたジャンルであり、「芸術」の名を冠していればどのような猥褻な表現でも容認されうるという前提が近代社会では了解されている。

5　病跡学という学問は、天才的創造活動と「狂気」の相関関係を明らかにすることで、共同体から逸脱する天才的創造者を社会秩序の内部に繋ぎとめようとする精神医学の一種である。

6　「芸術」というジャンルは、芸術家の個人的なエネルギーを社会内部に吸収するだけではなく、人々の内部にある反抗や否定のエネルギーを抑圧する装置として二重の役目を果たしている。

7　日常的な社会の安定を維持するという意味では、呪術的な社会のシャーマンや近代社会の芸術家という存在は、人々に潜在する逸脱のエネルギーを吸収する一種の社会的な安全装置である。

8　「芸術」という安全装置に頼る近代社会では、「安全」に保たれるのは共有される価値体系や社会規範であって、社会構造全体の「安全」は保たれるわけではない。

## 知識モノ解説

### 文学史・人物紹介

●村上陽一郎＝むらかみ　よういちろう（一九三六〜）東京生まれ、東京大学教養学部で科学史科学哲学を専攻、同大学院人文科学研究科単位取得満期退学。この分野における日本のトップランナーで入試現代文でも出題されつづけている碩学。上智大教授、東大教授、ＩＣＵ教授、東洋英和女学院大学学長などを歴任。

●Ｄ・Ｈ・ロレンス＝デービット・ハーバート・リチャーズ・ロレンス（一八八五〜一九三〇）イギリスの小説家。『チャタレイ夫人の恋人』は伊藤整によって日本語訳が出版されたが、「猥褻」ということで裁判になった（一九五一年から）。同様の事例には、澁澤龍彦（しぶさわたつひこ）が翻訳したマルキ・ド・サドの『悪徳の栄え─新ジュスティーヌ物語』がある

●マルセル・デュシャン（一八八七〜一九六八）フランス出身で、後アメリカ国籍を取得した前衛的アーティスト。工業製品の男性用小便器を『泉』としてニューヨークでの展覧会で展示して話題となった。

●ジョン・ケージ（一九一二〜一九九二）前衛的、実験的で知られるアメリカの作曲家。ピアニストがピアノを前にしながら演奏しない『四分三十三秒』という「作品」もある。また自身の思想については『小鳥たちのために』（青土社）に詳しい。「ケージ」には柵、鳥かごの意味もある

### 語句

シャーマン→呪術師

呪術＝じゅじゅつ→神仏や霊などと交信する術。またそのような文化をシャーマニズムという

超自然＝ちょうしぜん→科学的に説明できるような自然現象を超越していること。オカルト

加持＝かじ→災いが起きないように神仏に祈ること。加持祈祷（かじきとう）ともいう
トランス→意識が飛んだような忘我状態
憑依＝ひょうい→何かの霊や魂が人間にのりうつること
保証＝ほしょう→間違いないと請け合うこと。同音異義語「保障」は権利や生活や安全を守ること。「補償」
　は損害の埋め合わせをすること
執拗＝しつよう→しつこいこと
分泌＝ぶんぴつ→液状の物質をにじみ出すこと。「ぶんぴ」という読み方もある
尋常＝じんじょう→まともで普通なこと
アウトサイダー→仲間ではない人。部外者・局外者。反義語は「インサイダー」
逸脱＝いつだつ→本筋（ほんすじ）や決まった範囲から外れること
厄介事＝やっかいごと→できれば避けたい面倒な事態
概念＝がいねん→抽象的な言葉。考え方
符節＝ふせつ→印をつけた板を二つに割って別々にもち、仲間かどうか確認できるようにしたもの。割符（わりふ）・割
　札（わりふだ）ともいう
文士＝ぶんし→小説などを書くことを職業とする人。文筆業
テーゼ→ドイツ語で、意見・提言・命題などの意味
猥褻＝わいせつ→性的にみだらで道徳に反すること
惹句＝じゃっく→人々の注目を集めるためのことば。キャッチフレーズ
規範＝きはん→社会で求められる行動の型。ルールや規律
俗言＝ぞくげん→世間のうわさのようなもの。「俗にいう～」という表現で語られるもの
憤慨＝ふんがい→不当なことに怒りを感じること
カテゴライズ→分類すること。カテゴリー→分類項目・範疇（はんちゅう）・枠組み

代替＝だいたい・だいかえ→他のもので置き換えること
代償＝だいしょう→引き換え。埋め合わせ
自明＝じめい→当たり前なこと。いまさら説明するまでもなくおのずから明らかなもの
処方箋＝しょほうせん→本来は医師が薬などの処方を記した文書。転じてものごとの解決方法のこと

# 復習問題　第四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）重要箇所を反プク練習する　①複　②副　③復　④覆　⑤福
（イ）胃液が適度に分ピツされる　①筆　②必　③逼　④櫃　⑤泌
（ウ）患部にショ置がなされる　①所　②署　③諸　④処　⑤緒
（エ）背後からシュウ撃される　①襲　②蹴　③酬　④執　⑤醜
（オ）人里からカク絶した土地　①核　②閣　③郭　④隔　⑤拡
（カ）当ガイの社会について語る　①外　②涯　③概　④凱　⑤該
（キ）疎外されてフン慨する　①噴　②憤　③紛　④粉　⑤墳
（ク）出題されるヒン度が高い　①品　②貧　③頻　④賓　⑤瀕
（ケ）敗戦の空気が濃コウになる　①興　②厚　③候　④広　⑤高
（コ）次善の代タイ案を考える　①替　②耐　③待　④退　⑤対

# 第四講　模範解答

問1　A　4　B　2　C　1　D　5

問2　5

問3　(1)　4　(2)　5

問4　2

問5　1

問6　1、7

# 復習問題　第四講　模範解答

（ア）③　（イ）⑤　（ウ）④　（エ）①　（オ）④
（カ）⑤　（キ）②　（ク）③　（ケ）②　（コ）①

解答漢字一覧

（ア）反復　（イ）分泌　（ウ）処置　（エ）襲撃　（オ）隔絶
（カ）当該　（キ）憤慨　（ク）頻度　（ケ）濃厚　（コ）代替